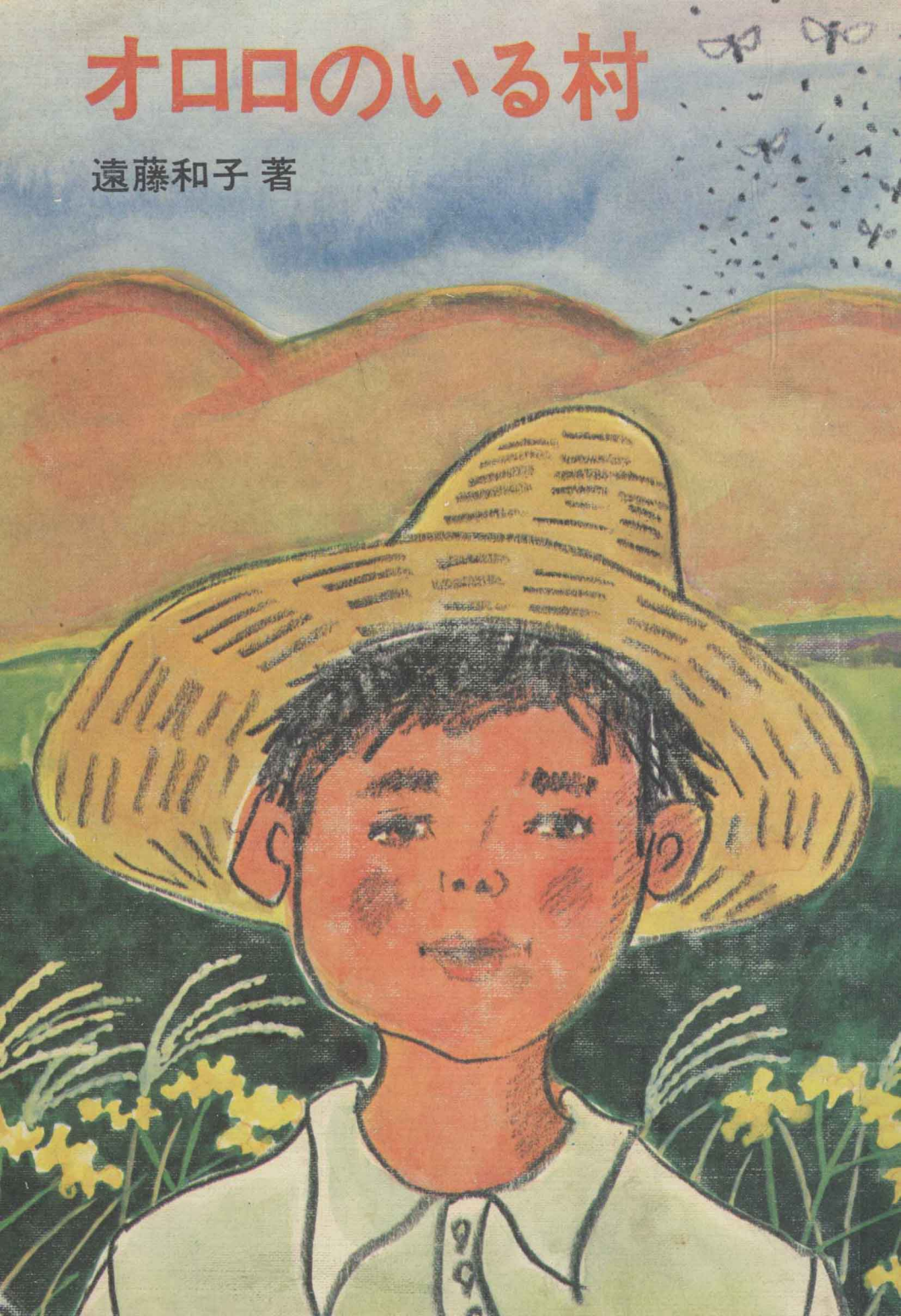


オロロのいる村

遠藤和子 著



あすなろ創作シリーズ 15

オロロのいる村



1973年11月 再版発行 680円

著 者／遠藤和子

発行者／山浦常克

発行所／株式会社 あすなろ書房

東京都新宿区弁天町107 (〒162) 石嶋ビル

電話 (203)3350／振替東京63084

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 有限会社 今泉誠文社

N D C 913 遠藤和子 オロロのいる村

あすなろ書房 1973 208p 21cm (あすなろ創作シリーズ15)

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はおとりかえします

オロロのいる村

遠藤和子 著



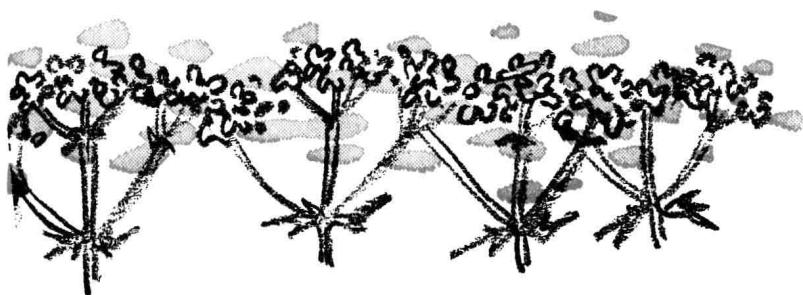
目次

第一章 オロロのいる村

- 1 とびたつわたり鳥 6
- 2 かわった紹介式^{しょうかい} 17
- 3 オロロのいる村 25
- 4 つゆはらい 31
- 5 怪獣^{かいじゅう}——オロロ 39
- 6 るするす番先生 44
- 7 七草分教場 55

第二章 にげだした わたり鳥先生

- 1 オロロのしゅうげき 68
- 2 オンドロ祭り^{まつり} 78
- 3 吸血虫^{きゅうけつ}——オロロ 85
- 4 山をのがれて 93



第三章 オミナエシの星がいっぱい

1 まいもどった わたり鳥先生 104

2 あやしい かしオロロ 114

3 かしオロロの正体 121

4 たからさがし 132

5 オミナエシの星がいっぱい 139

6 連合運動会 150

7 山じゅう こぞって 157

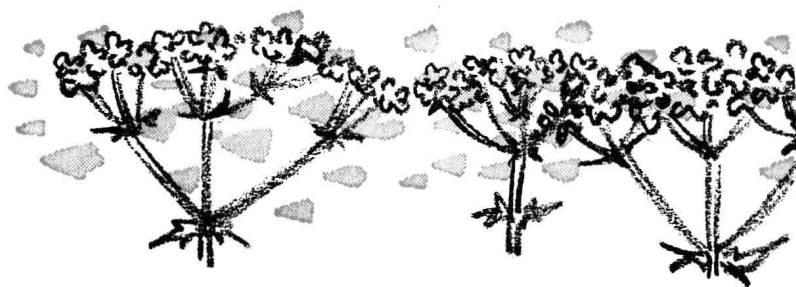
8 月夜のがいせん 166

第四章 わたり鳥の旅だち

1 ピーパーくん さようなら 178

2 ツグミ先生は わたり鳥じゃない 189

あとがき



■紹介■

遠藤和子（えんどうかずこ）

一九二五年富山県に生まれる。富山師範学校卒業。教員として現在に至る。そのかわら児童劇作家斎田喬氏に師事し、児童劇作、童話創作活動を行なう。

日本児童演劇協会会員。日本児童劇作の会会員。富山県児童文化研究会会員。『学校放送百選』などに執筆。著書『あしたの歌』『おとなってみんな悩んでいるのね』など。

岡村紀子（おかむらとしこ）

東京神田に生まれる。女子美術大学にて洋画を学び、現在は童画の仕事に励んでいる。作品に『南代の少女』などがある。

第一章
才口口のいる村



1 とびたつわたり鳥

谷川ぞいの山道を、バスがうなるようなエンジンの音をたてながらのぼっていきます。道はもうだいぶせまくなって、両がわからつきでている木のえだが、バスにぶつかってはバサッ、バサッとはねかえってきます。

谷底から上がってきたひんやりとした風が、ぶーんとしめった木のおいをふくみながらバスの中にはいつてきました。それが、バスのしん動とあいまって、大木山先生をとろりとさせます。

入れかわり立ちかわり乗っていたのら着すがたのおひゃくしょうさんたちも、すっかりおりて、お客は大木山先生だけです。

とつぜん、大木山先生のからだか、ざ席にたたきつけられました。

「チョッ、どかんか！」

運転手さんが、したうちをしながらクラクションを鳴らしました。



大木山先生はからだを起こし、目をまるくしました。

うす暗い道のまんなかに、キツネ色をしたネコみたいな動物がうずくまっているのです。

「タヌキめ。バスの音にびっくりして、にげるにかいて、とびだしおって！」

運転手^{てん}さんが、またクラクションを鳴らしました。するとタヌキは、びくつと頭をもたげ、とことこ坂道を上がっていききました。バスが、のろのろついていきます。

しばらくして、しびれをきらした運転手さんが、ひととき高くクラクションをならしました。するとタヌキは、びくんと立ちどまったかと思うと、ころころがりながら、くさむらの中にとびこんでいきました。

大木山先生は、思わずふきだしました。

やっと、バスが走りだしました。

「ねえさん、どこまで行くがけ。」

わかい男の車しょうさんが、まだわらいの残っている顔で、大木山先生に話しかけてきました。

「野坂村に……。」

「えっ、野坂村。なんで、あの村に？」

みなまで聞かず、車しょうさんが声をあげました。そのおどろきように、大木山先生のほう

がびっくりしました。

「どんなところなんでしょうか。」

「へえ、なんにも知らずにねえ。」

車しょうさんは、大木山先生をまじまじと見つめました。

「それにしても、どうして、そんなところでかけるがだね。わかくて、ハイカラな人がね。」
いかにも、ものずきな、いいかげんです。

「先生になっていくんです。」

「ああ、すると、おととい山をおりた、おくさん先生の代わりってわけか。長つづきするかう。」

大木山先生は聞いているうちに、なにかしら不安になってきました。

大木山先生は、しんまい先生の産休先生です。つまり、お産のために休まれる女先生のるすをあずかる先生なのです。

県の役所から、どこの学校に行くかを連絡されては、でかけていきます。そして、よほどのことがないかぎり、同じ学校に、三カ月とちょっとしかいません。ですから町の学校にいたかと思うと、どこにあるかも知らない山おくや海べの学校へと、移り変わっていく、わたり鳥み

たいな先生です。

この春、大学を卒業して、ずっと家にいた大木山先生に、野坂分校へ行くようにとの話があり、それで、やってきたのです。

運転手さんが前を見つめたまま、話しかけてきました。

「おくさん先生のまえに、何人もの女子先生が行ったけど、みんな、夜にげみたいにして山をおりてな。村を見に行っただけで、やめた人もおったしなあ。」

いいながら、カーブをきりました。

バスが大きくがけを回り、目のまえがぱっと開けました。

大木山先生はなにげなく顔をあげ、目をみはりました。

大きなダムをつくっているさいちゅうです。谷間いっぱい、高い屏風を立て回したようなダムの壁。そこに、黄色のヘルメットすがたの人たちがへばりついていきます。はるか下に、谷川をはさんで、カヤぶきの家がぼちぼち見えます。ダムの壁近く、マツチばこをならべたように見えるのは、トラックです。その回りで、マメつぶほどのヘルメットが無数にうごめいていきます。

「来年の春に完成するということだ。とちの木村も、いよいよ湖底にしずむかあ。」

車しょうさんが、しんみりしたちょうしでいいました。

「あれが、シコタのトンネルでね。」

運転手さんの声に、大木山先生はダムから目をはなしました。

前方に、切りたったガケが大きく立ちふさがり、ガケの下のトンネルから、きりが流れでては空へまい上がっていました。

バスは、すいこまれるように、トンネルにはいりました。ヘッドライトがぱつとつき、はい色のきりが、いきおいよく、バスの中にすべりこんできました。バスの音がトンネルに反きよくして、飛行機のばく音みたいです。

「トンネルのなかったむかしは、ナダレや山くずれが多くてのう。村の人たちはこの山をこえるのに、なんぎをしたってことだ。」

きりの向こうから、運転手さんの声が、とぎれとぎれに聞こえてきました。進んでも進んでも、はい色のしずんだ世界です。

やがて、すうっと、きりがうすれたと思うと、急に、あたりが明るくなりました。バスがトンネルをでたのです。

そこは、小さな広場になっていて、バスの終点でした。谷川をはさんで、山と山とがくつききそうにせまっています。つい、さきごろ、山くずれがあったのでしょう。角ばった大きな石

が、なだれ止めのサクをこえ、いくつも道にころがっています。その間を、これもガケをつたってきた水が、いくすじもの細い川をつくりながら流れていました。

「野坂村は、ほら、あの山の向こうだよ。」

運転手さんが、遠く、青空の終わるところに見える山をゆびさしました。

「あのお、クマでも多く住んでいるところなのでしょうか。」

大木山先生は、さっきから気にかかっていることをたずねました。

「クマか。そうなのう。五、六十頭ぐらいはいるかのう。」

「八十頭はいると聞いとるよ。それよりも……。」

「まあまあ、ともかく行ってみたほうがいいよ。」

「そうそう、行ってみていやなら、その足ですぐもどってくればいいからな。」

ふたりの口ぶりでは、クマではなさそうです。大木山先生の心に、大きな不安がおしよせしてきました。

「ここから野坂村まで、一本道や。」

「とちゅう、タヌキやイタチに気をつけてな。」

ふたりは、ぼうっと立っている大木山先生のかたをたたくと、バスの中にもどっていきました。

ブルブルブルブル

バスが、トンネルの中にはいつていきました。やみの中に赤い目玉が二つうかび、すぐ、まっ白なきりの中にかくれてしまいました。

ガーン、ガーン

ずっと遠くのほうで、ダム工事の音が重いひびきをたてていました。

大木山先生はそれを聞くと、ひとりぼっちになったさびしさがむねをつき、持っている荷物を落とすようにして、その場にしゃがみこみました。人の住んでいる世界が、手のとどかない遠いところに去ってしまったようです。せなかのリュックサックが、からだにくいこんできました。

野坂村は、地図で見ると、富山県の西を流れる小矢部川おやべがわのみなもとにあり、石川県との県境かいを示す赤線のま下にあります。そのところが、黒っぽいぐらいの茶色になっていますから、人が住んでいるとは思えないくらいです。それで、ずうっと山の中でくらさねばなるまいと、かくごをしてやってきたのです。

しかし、何かおそろしいことが待ちかまえているのです。それが、クマよりもおそろしい猛もう

獣であるのか、雪男のようなものであるのか、かにもわかりません。

ひょっとしたら、野坂村は、山窩さんかとよばれる人たちの集まりなのかもしれません。

山窩さんかとは、人の住むことのできない山おくを、狩かりをしながら漂泊ひようはくして歩く人たちのことです。その性格も凶暴きようぼうで、人里に住む人たちからおそれられているということを、本で読んだことがあります。

いまの時代に、そんな人たちが住んでいるとは思えませんが、人の住めないような山おくですから、わかりません。

「何人も女子先生おなごが行ったけど、みんな夜にげみたいにして山をおりてな。村を見に行っただけで、やめた人もおったしなあ。」

運転手てんてんさんのことばや、野坂村と聞いたときの車しょうさんのおどろきようが、あざやかにうかんできました。

ホー、ホケキヨ

大木山先生は、ふうっと顔をあげました。

ホー、ホケキヨ

目と鼻の先の川向こうで、ウグイスが鳴いています。その声が、静かなすんだ空気をふるわ

せながら、大木山先生のからだの中にはいっていききました。そして、心をおおっている不安を洗うように、静かにふるえだしました。

やがて大木山先生は、流れ落ちるあせをぬぐいながら立ちあがりました。それから、野坂村があるという空のあたりをながめ、大きく息をはくと歩きだしました。

不安は消えてはいないけれど、運転手さんや車しようさんがいったように、ともかく行ってみようと思ったのです。

つづらおりの山道を、のぼったりおりたりして二時間あまり。木のえだのうす暗いトンネルをくぐりぬけたとたん、目の下にぼっこりと野坂村があらわれました。

大木山先生は、思わず立ちどまりました。

高い山にすっぽりとかこまれたスリパチの底に、白い色をした二階建てが見えます。ま夏の日の光が、その建て物を黄色くそめています。山のところどころから、炭やきのけむりがすつとたちのぼっています。その下のだんだんになっている木々の間から、カヤぶきの屋根がぼちぼち、のぞいています。

大木山先生の立っているところから村までに、小矢部川[※]ぞいに、細い坂道が一本。その道のところどころに、だんだん畑がまねごとみたいにつくられています。どうどうと流れる小矢部